

速記とともに生きる

寝言にまでインツクキの妙法

第1話〔昭和31年9月号 No. 6〕

山紫水明の京都も、夏の暑さは格別である。速記の土用けいこ。長髪の正親先生が汗だくの熱演、久留米がすりの正世先生は俊敏な助演であった。

そのとき20歳の青年であった僕はただただ感服陶醉あるのみ。講義の一言一句が魂を打って飛び込んでくる神業にも似た妙技に対して胸中で幾たびか快哉を叫ばざるを得なかった。

Hは僕の親友であった。彼が相国寺付近にいたのを幸い、彼の下宿に泊まって速記の講習を受けに行ったのであった。竹やぶのセミも静まるころになると、京都の夜はさすがに涼しい。音楽講習から帰ってきたHと、音楽を放って速記へ行ってきた僕とが互いに報告し合うのである。

3日目は速記のクライマックスである。「インツクキの妙法は」と僕は講師気取りで、何枚も何枚もの紙を使って、妙法の由来を講義する。Hは、ただ1人の聞き手、僕は講師である。2人は寝転んで、なおも語り続けるうちに、いつしか寝入ってしまうのだが、翌日起きるとHは、

「小林君、よほど感激してきたんやなあ、夜中に、インツクキの妙法は、を繰り返すので、僕は何遍驚かされたかわからん」

と笑う。寝言にまで速記の伝講にこれ努めたわけか。それほど僕は感激したのである。

おかげで5日間の講習は、その場で完全に覚えた。海綿が水を吸うように……。

法則によってつくられている速記文字であるから、法則に当てはめて書けばよいし、法則によって読めばよいのである。このくらい覚えやすいものはない。ややこしいというのは頭がどうかしていると申し上げたい。

ただ講習が済んで、すぐさま、すらすら書いて読めるようなことは無理であるが、考えると必ず出てくる。これが中根式速記文字の特長である。僕はこの5日間に、5年分ぐらい、いやそれ以上の急激な成長をしたのであった。速記という新しい血が流れ始めると、全身が物すごい鳴動を起こし細胞の数が音を立てて分裂していくように覚えた。

新米教員が老校長を助ける

第2話〔昭和31年9月号 No. 6〕

某日、僕とこの学校の校長が職員を集めて、心配そうな面持ちで訴えるのである。

「諸君困った貧乏クジを引いてきたよいチエがないだろうか。今度研究発表大会というのをやらなならんが、その発表者を物色しているけれども、どこの学校も逃げてしまっていて引き受け手がない。ではクジビキにでもしようというのと、そんな無茶を言うな。幹事校長さんのところで責任を持ってくれんと困るではないか、衆寡敵せずとうとう押しつけられてきた。どうしたもんだらう」

古参教員は顔を見合わせている。幹事校長の学校の職員は、なぜギセイにならねばならんのかといった顔で。

「幹事になったらつらい。何分今度は大々的なもので、市のお声がかりだから命が縮む思いがする」

従何位勲何等奉任官の元老校長の悲痛なため息である。

そのくせ皆に希望の有無を問うても見ない。消極的な伝統を知っている校長は、一々問わなくても、ないに決まっていると割り切っている。それもそのはず、新卒の僕らは、経験者から見れば宿直ばかりやらされている青二才であるから、眼中にないのも当たり前。物の数でもござらぬらしい。

現実の学校とはこんなものだろうか漱石の坊ちゃんでもなく、ウズウズ腕が鳴る。僕はもうこらえ切れなくなって、

「私、やらさせていただきます」

「何？君がやるって？研究発表だぞ本当か」

「私で構わなければやります」

「構うも構わんもあるものか。そうか、そりゃ助かった。どんなことをやってもらおうか、わしも考えるが教頭にもよく指導してもらおうてくれ」

校長の頭は、いつの間にか曇り後晴れで、ご機嫌上々。

僕は太勢おって何が先輩だ、何が太校長だ。何もできやしないではないか——。と口には出さなかったが色に出にけりであったかもしれぬ。

青年教師の僕は、連続宿直をも甘んじて引き受け、ひたすら、研究発表の構想を練りにかかった。

漢字制限より中根式速記文字へ！

第3話〔昭和31年10月号 No. 7〕

研究発表者が決まって肩の荷をおろした校長の顔はさすがに明るく、廊下の出合い頭にでも「小林君準備やってってくれるか、わしも昔は少しやったが年が寄るとあかん。うまいことやってくれたら視学サンにも認められるしなあ」僕「そうですか」

2～3日たつとまた校長は「君やってくれるやろなア、何せ今度は人物抜テキの機会になる、相当の経験者ぞろいやそう。君は恐らく最年少やろうがうまくやってくれたら出世の早道やから」と恩に着せたような言いぶりでもある。僕はただ「そうですか」

日は迫っていよいよあと2日というのに一体何をやろうと思っているのか皆目検討がつかぬところから、校長は不安を感じ出したらしい。

「お聞きいたしたき件あり、至急出頭相なりたし」小使いさんが僕の教室へ紙片を持参に及んだ。（授業中のお呼び出しか）と僕はその用件を直感した。

校長は広い机上进行を片づけ、回転イスで身を動かして肩のコリでも直しているらしい。

僕の顔を見るなり「君発表の用意はデケとるな」僕「あらかたできております」「よしよし、どれ？」僕の手から原稿を引ったくるようにして見入る。

第1行目に――漢字制限より中根式速記文字へ！――とある。

「何？漢字制限よりチュウコン式……」「チュウコン式と違います。ナカネ式と読むのです」校長はうるさそうに、「ナカネ式はハヤガキ文字か」僕「ソッキ文字です。ただ早く書くだけの技術でなく、全く別なソッキ文字という特別な文字でありまして、それが……」

「君、待ちたまえ。速記なんてものは文部省の教授細目のどこに載っている？修身、国語、算術、国史……どこにもないじゃないか。一体このミミズみたいなモンはナンや？（語気荒く）君も免許状を持って職を奉じている教員やろがな、こんなもの学校で教えてよいかわかつとるやろがな」老眼鏡の上から白い眼がにらんでいる。

僕「教えます、アメリカでは速記の単科大学さえありまして、教えないのは教える教師がないからです。イギリスでも創始者ピットマンの百年祭に皇帝みずから……」

苦虫口調で「外国と日本とは違う。若い者はこれやから困る。今度の催しは、督学課から尻をたたかれてやることになったもので、沈タイしている教育界を覚醒させるために、役所からおそろいでお偉方が見えて、刺激を与えてくださることになっている。我々幹事校長の立場も考えてくれんと困る。ホント困ったことになった！」

校長のゴキゲンすこぶるよろしからず。卓上のベルをたたいて教頭を呼びつける。教頭は校長より年上で、何代もの校長に仕えたことをジマンにしている万年教頭である。欠勤届をとじたり、タンサン紙で写しをとったり、銭の勘定にかかっている、絶対に校長にはなれない無精卵教頭である。

この人、僕の原稿をのぞき込んでいつまでたっても何とも言わぬ。たまらなくなつた校長はコメカミをピクピクさせて「君はどう思うのか、これでよいのか、君にも半分の責任があると思う……研究発表というからには、国語、算術のような重要学科をねらうのが得である。国語の中でも漢字教育は最も重視せねばならんが、漢字制限ということからして時代に合わん、とわしは思とるぐらいじゃが……」

感受性の鈍い教頭は「私が指導して上げなんだのが落ち度でした。今さらやり直しもナンですから、いっそのこと、こうしたらどうです。思いつきですけど……この題目を2つに切って、あと半分は捨ててもろたらどうですやろ」先輩先生のメイ案。

「何？2つに切るとは？」校長もメン食らったらしい。教頭「つまりですな『中根式速記文字へ』という部分を切り捨てて、『漢字制限より』だけ残して『漢字制限』という題に縮めるのです。どんなモンですやろ」ケロリとした沈着ぶりである。

さすがの国粹校長もア然とした。この論文の前半こそ、中根式速記文字への序曲ではないか。血のめぐり悪い奴の鈍刀で胴切りにされようとは、アホらしくてモノが言えない。僕は「ご勝手に」と言い捨てて我が教室へ帰った。

目の前に迫っている発表会を控えて、校長室でどんな相談があったか僕は知らない。やがてまた呼び出しがあつて、今さらどうにもならぬというのか朝議は一変している。

「最初の題目でしかるべくやってくれ……」というキゲンとりである。「しかるべ

くやる？」すこぶる意味深長なコトバである。旧時代の人にしかわからぬコトバである。

僕は校長らの不認識に少しからずハンパツを覚えた。こうなれば中根式速記のために思う存分気を吐こう。発表大会は目前に迫った。用意はよし。闘志はもりもりとわきあがっておもしろくなってきた。

初めて速記文字を見る人の感激

第4話〔昭和31年11月号 No. 8〕

大阪市初等教育研究発表大会の日は来た。(大正13年、32年前のこと) 授業を打ち切って出席を強制されたためか、会場に当てられた公会堂は1,000人を超える教員で座席が埋められている。

受付で渡された番組を見ると「低学年における寓話の取り扱い、課外読み物の研究、応用問題の指導、教科書にあらわれた公民教材について……」など小学校令にある範囲のことばかりである。

あすへの教育に何かを得たいと集まった先生方も、これらの題目には飽き飽きしている。発表者も書物や雑誌から借りた意見を不消化のまま原稿と首っ引きで発表するのだから、魅力も新鮮味も感じられない。禁煙の張り紙にタバコも吸えず、コクリコクリの風景。

最後に僕の登壇。「漢字制限より中根式速記文字へ！」が外道的注意を引いている。コンスイ状態からさめた大衆は、速記というコトバに好奇心をいだいているのか、それともこれが済めば無罪放免になるという解放感からかともかく拍手が多い。

「高いところでお話するのは初めてで、あいにくノドを痛めておりますので……」というアイサツが、いかに心理的にマイナスであるかを心得ている僕は、第一印象を焼きつけるため、まだ拍手の残っている間にチョークを握った。総員沈黙――

「諸君！中根式速記につきまして講演をいたしますことは私の最も光栄とするところであります」と速記文字で一息に書いた。生まれて初めて速記文字に直面する人々の異様な感激である。僕は棒で板書を指しながら読んでいった。期せずして嵐の大拍手！僕はシメタと思った。さらに今度は速記文のしっぽから逆に読んでみせた。「あります、ところで、する、光栄と、最も、私の、ことは、ます、いたし、講演を、につきまして、速記、中根式、諸君」

拍手は再び繰り返された。視覚教育は100%奏功したのである。僕はこうしてケムに巻いておいて、すかさず論を進めた。

「国語教育といえば漢字教育であり漢字教育は書き取り教育である。漢字をたくさん知っていることが学者であり、エライ人になっている。だから学校では漢字教育に全力を注いでいる。学校とは漢字を教えるところである。しかも漢字はムツかしくて、数学の問題が読めぬ、地歴の本が読めぬ。中学を出ても大学を出ても……」

「自分だけ漢字という七ツ道具を背負い込んで世界人とマラソン競争をしている、その人の名は日本人でないか。これを救うためには、漢字の数を制限して、文字からの負担を軽くすることが急務である」と説き、その具体案を述べた。

「しかし、形のやすい字といっても例えば小学校の教科書だけにでも下という字のヨミ方が10とおりもある。字数とともにヨミ方をも制限し、難しいものはすべて仮名書きにする」

「こうした漢字制限も中途半パであるから、さらに漢字を全廃し、やがて速記文字をもって国字とすべし、という抱負を持っているのである。ここに至って日本人は、たちどころにメクラからメアキになるのである。ではその開眼方法に話を進めよう」。「待ってました」激励の声起こる。

× × × ×

僕はまず速記文字で「速記」と大書して、ソとキの字を教え、交差するとツマ音となってソッキとなると説明した。(何と簡単なものだ)という感波？が起こる。そこで速記文字も基本は50音であって、アの字からイウエオを誘導する秘法を説き、あとはカ行サ行タ行程度の説明にとどめて、用意の基本文字表を掲げ、結局アカサタナハマヤラワを知れば50音全部が書けることを教えた。

聴衆は(これは聞き流しならぬ)と思ってか、紙ぎれや豆手帳を出して鉛筆をねぶり始めた。後ろではよく見えないのか折敷姿勢で前へ詰め寄せる通り道などギッシリでリッスイの余地もない。

「濁音はどうしますか」という質問第一号が飛んできた。「ンの字はどうしますか」第二号が続いてくる。学習意欲すこぶる盛んで、理想的な快調。

「濁音は太くする、ンの字は頭にマル」というだけにして、実例で書いてみせる。聴衆は指で書くマネをしたり首を運筆どおりに振ったりして、わかったという顔を見せてくれる。フン囲気は高まるばかりである。

「飛行機、学校」という漢字を速記で書くと、画数から計算して、それぞれ4.2倍、5.1倍の速さで書けるといってヤンヤと喜ばせた。

要するに「速記文字は、法則でつくられてあるから、法則で書き、法則で読む。だから忘れようとしても忘れられない。これを国字とすれば、日本人はたちどころにメアキになる。心ある方々と研究しよう」と結んだ。

感激絶賛の拍手を一身に集めて降壇すると、待ちかねた人達が、速記で書いた自分の名前を読んでみてくれと持ってくる。一風変わったサイン攻めであったろう。30分の割り当て時間にこれだけの波紋が起きた。奇跡ではないかと思った。僕は少なからず優越を覚えた。

蘭学事始めを思う教養講座

第5話〔昭和31年12月号 No. 9〕

わたしのまだ暦年齢も速記年齢も幼いころである。大阪市では学校の先生をにわか
に賢くするための教養講座が開かれた。文学、哲学、宗教、経済、天文、美術、道徳、
政治など数科目、毎週3回3時間ずつ、1科目5回。

わたしにこの講座の速記を持ってこられたとき「来たな、どうしよう？」と思った。
正直なところまだ自信が持てなかったからである。

「余りにも重荷です。カンベンしてください」かたく断ろうとすると「君はこの間
も速記の研究発表をしてくれた。できないはずはない。ぜひやってくれたまえ」所属
校長そっちのけで市学務からの直談判である。速記を知っていること即完全に書ける
と飛躍的に解しているらしい。「できないと言えばホントにできないのです」「そうは
言わさぬ、ケンソソするな」絶対命令には向かうすべがない。お引き立てはありがた
いが光栄ある過大評価である。

開講一番H博士のドイツ文学である。講師は京大の花形、その豊富なウン蓄を熱情
を込めて説くところは縦横無尽聴衆はすっかりケムに巻かれた形。

アメリカでは速記にも専門があって政治、経済、芸術、科学というように別々に速
記者があると聞いている。日本では速記者が足りないから技術は幼稚なのに何でも速
記せねばならんというムジュンをあえてせねばならない。

一体講義を聞くにしても、自分の実力だけしかわかるものではない。素養がなけれ
ば音響として聞こえているだけで馬の耳に念仏というか、ただ鼓膜を振動させている
にすぎない。

聴衆の大部分は睡眠モウロウ三昧境を往来してござる。イビキを発して当たりを苦
笑させるのさえもある。話が難しいのであろう。

だが、わたしはこの講義を速記する大任を負っているのである。おまけに講義は低
音でつぶやいているようで、語尾がすこぶる不明。それに板書の横文字にも気をつけ
ておらねばならずたまったものではない。脳充血のように頭が熱くなるかと思うと、
たちまち脳貧血の襲来で寒くなる。目まいがする耳がジーンと鳴る。聴衆のすべてか
わたしの指先に集まっているように覚えてツルシアゲにあった思いである。

永井柳太郎の「諸君、今や何々」調とは大分勝手が違う「あります、ございます」
の高等符号を知っていてもカンジンの内容がつかめていなければダメ。実力なきをい
かんせんやである。

わたしは気を落ちつけ、極力省いてなるべく要点を書くように戦術を転換せざるを
得なかった。「申すまでもなく」とか「ご承知のとおり」とか、副詞や形容詞などは
時に見送るようにしたが、この芸当も容易のワザではない。一連の語句を聞いてから、
おもむろに取捨するというような心のユトリがない。新米の時代には「聞きだめ」が
できないから、聞けばすぐに書かぬとアワのように消えてしまう。これも達人の域な
らでは……である。

やっとのことで中休みとなる。わたしは、速記原稿の枚数がヤタラにたくさんになっているのにおののいていると、居眠りからさめた連中がたかってきて「これが速記というモンですか便利やなア」と感心してくれる。完全に書けていると思っているらしい。わたしはニンジツ使いのようにうらやまれているものの、その実、休み時間にさえヒヤ汗である。

× × × ×

家へ帰る。体はへとへと。きょうからは大事業開始というので書斎の整頓装飾など、新妻の心づくしがあらわれている。部厚な原稿に見入る。冷静なときには相当書けているのに、いざ人前でやるとなれば、かたくなるのとテイサイも手伝って運筆がハデになる。

反訳になると大本営発表ではないが、ブランクの頻出である。ど忘れした漢字なら安物の便利字典で結構間に合うが、こういう外国文学の講義などチンプンカンプンである。

当時を思い出してみると、例えば次のようなコトバが浮かんでくる。

「神性の否定、新エロイーズ、思想の皺、献詞、タツソウ、知と行、実在、自然即神、コルフ、譏消的、デイニューズスの、詠嘆的文芸、浪漫的反語……」

発音はわかっているけど、どんな漢字なのか、術語となると難しい。また、いわゆるカタカナ外来語はとても骨である、人名か地名か、人名にしても実在の人物か作品中の仮想人物か。引用語や西暦年数にしても聞き違いをしていないか……

こう考えると何1つ自信がない。今さら学識の貧弱さに愛想がつきる。自分の蔵書はもちろん、学校から持ち帰った書物、さては丸善や古本屋から探してきた参考書にまで手を伸ばして内容の正確を期することに努めた。

文学全集、人名辞典、地名、歴史、思想、地図、系図、年代表、年鑑、統計、漢和、言海……

妻はわたしの注文に応じて必要な書物からページを探して突き出す。うずたかく積み重ねた書物の中から、用済みのものを一旦引き取って机上を広くする。図書館の出納係そっくりである。

この本のこの辺にあるはずと探るのだからなかなかはかどらない。まごつく妻をしかってみたり、自分のカン違いから謝ってみたり……

時は移る。10時ごろかと思う間に12時が鳴る。1時ごろかと思うと3時である。妻はわたしの真向かいから座って見守っている。そのおかげで、彼女は速記をサカサマの方向から読む方が速いというナンセンスを生みもした。睡魔が近づくと妻はわたしの肩にドテラをかけたり、シブ茶をくむという気の使い方。それも毎晩のこととて積もる疲れに、2人とも机の上へ最敬礼をしていることさへ珍しくない。

× × × ×

明和8年（1771）杉田玄白は前野良沢と死刑囚の解剖を見て大いに感激しターフル・アナトミヤというオランダ人の本のホンヤクして『解体新書』を出版したことは有名な話であるが、その苦心のほどが思い出される。

「……当時少しくオランダ語に通ずるものは良沢1人であって、始めは列座して、その書に対して憶測を下し、原文1行を訳するに、数日を費やしたこともある。かくのごとくすること1年余にして始めて1日に10行を訳し得るようになった。

眉というものは目の上に、生えている毛であると書いてあるような一句でも、ぼんやりして長い春の日1日かかってもはっきりつかめない。日が暮れるまで考え続け、互いににらみあったままでわずか1寸か2寸の文章でもその1行もわからないこともあった」

「やっと氷解するに至ってはみな狂喜して手の舞足の踏むところを覚えざるものがあつた」

先覚者の歩んだ道は険しい。いつか読んだ「蘭学事始め」の一節である。

わたしは反訳中どうしてもわからぬ1つのコトバのために、その一句をカットしようかとも考えた。そうすると「風吹けば桶屋喜ぶ」になって、どうしても良心が許さない。こんなときにはきっと中根先生の声が聞こえてくる。

「奮闘努力！奮努！フド！」

ハッと我に返って勇気を起こす。直線を曲線にしたり、細線を太線にしたり、小円を大円にしたり、類似、対比、連想などあらゆる置きかえを試みる。蘭学者はもとより知らぬ他国語のホンヤクであるからムリもなからう。わたしは、わたし自身が書いた速記原稿に悩まされている。訴えるところが無い。お恥ずかしい次第とは申しながら本音を吐けばこの始末。それにしても、やっと解けた愉快さは、知る人ぞ知る。近ごろ流行のボナンザグラムどころのサワギではない。

一山超えたら次の山。精力は不思議にわいてくる。かくてマル百日。わたしらの夫婦生活は速記の一事に明け暮れした。荷をおろして振り返る山々はなつかしい。霜に耐えてきた紅葉は美しいと妻はたたえるのであつた。

至純至高、全国高校中根式速記競技大会！

第6話〔昭和32年1月号 No.10〕

腕を磨き技を競うことは、その道の発展には、極めて有意義なことである。今や世相を移して、各種各様のコンクールが、級数的に続々と生まれつつある。世はまさにコンクールの時代と申し上げたい。

美人コンテスト、のど自慢、バスガイドのようなハデなのから、競馬競輪などのギョウコウを頼むもの、カナリヤの鳴き合わせやバラの鑑賞は上品な部類、タイプやソロバンになるとわたしらの関心が起こってくる。知的な遊技にしても17万円もかけられているとすれば、行き過ぎを指摘せねばなるまい。コンクールもピンからキリまである。玉石をコンコウしてはならぬ。

わたしはこうした世相の中から、至純至高な3つのコンクールを数え上げて、皆さんとともに賛美したい。

その1に朝日新聞社の主催する全国高校野球大会がある。大正年4年第1回を開催、京都二中の優勝以来、回を重ねること38回。炎熱の甲子園に展開する白球の祭典は、堂々の風格を備えたものとしてたたえたい。

その2に、NHKの主催する全国学校唱歌コンクールを挙げたい。低俗な音楽が横行する中に、この存在こそはニゴリにしまぬハスのように、大空に瞬く星のように、いとも気高く輝いている。キン線を揺すぶる音楽の波は、古今両洋に交流して、若い魂を美しく育てることであろう。電波が取り持つ最良のコンクール。

その3つは（3番目というわけではない）我が全国高校中根式速記競技大会であること、論を待たずである。

その歴史的記念日たる昭和6年12月28日、東京日比谷会場において優勝感激旗のもと、全国より集まる速記の精鋭が、机を並べてペンを競う盛観！開ビヤク以来、未曾有の快挙。「世に新しきもの生まれたり」と速記史否文化史上に特筆大書すべき壮図であった。

第1回の栄冠は、大阪天王寺商業にサン然と輝いた。代表選手羽間乙彦君の躍如たる姿が思い出される。

中根先生の「速記報国」の熱願は見事実現し、速記の国新日本の建設運動は、これより画期的に発展の一途をマイ進。昭和31年には、大会もはや23回奮闘はついに奇跡を生む。

それにしても、わたしはここに、3つのコンクールを推賞した以上、これらに共通する特長を、簡単に挙げてみたいと思う。

1. 生命の燃え盛る若い学徒を対象としていること。
2. 純真な学徒の知性と感情に訴えていること。
3. 奮闘努力によって、限りなく上達することを教えていること。
4. 文化の進展向上に貢献し得るものであること。
5. 社会に対する普及性を持っていること。
6. 修練するほど人間としての教養が高められるものであること。
7. 長期にわたる発展の歴史を持っていること。

速記競技大会が、これほどまでに白熱化した原因は、前にも述べたとおり、対象を学徒に持っていった点にあると思う。生命の燃え盛っている若き学徒は、純真そのもので、欲得のために速記を学ぶのではない。

魅力を持った速記文字に触れると、研究意欲がもりもりとわいてくる。征服せずんばやまずの勢いで取り組んでくる。希望に満ち、感激のままに全力を集中する。

学徒の本領は感激であってソロバンではない。速記を習っておけば、就職にトクだというシミッタレた打算なら試験に失敗すると、すぐ参ってしまうだろう。将来、何職につこうと、速記を使いこなすのだという信念を持って研修する。それが永遠に生きる学徒の面目ではあるまいか。

感激性なき民族は滅ぶという。命若き学徒に「速記」という至宝を授けたまいし中根先生のケイ眼には、恐るべきものがある。

速記の流派には、中根式のほかに、20～30種もあろうと思う。毎日の新聞に、3行5行の虫メガネ広告が絶えないのは、速記塾の経営の難しさを物語るものだろう。

他式が遅々として普及せず、広く国民層へ浸ジュンしないのは、方式のせいもあろうが指導者の頭が狭いのではないかと思われる。すなわち、

1. 速記を特殊技能とのみ思い、職業速記者を目標に教えていること。
2. 国民総速記というような、雄大な理想目標を持っていないこと。
3. 速記国日本を建設して、漢字国難より解放し、日本 — 世界文化に貢献するなどチンプンカンプンであろう。
4. つまり、国民のすべてが、速記文字を日常生活に使用するのが最後の目標であることを、中根式以外は、余り強調していないこと。

全国高校速記大会の原動力は何か？

第7話〔昭和32年2月号 No.11〕

速記の国、新日本の偉観、全国高校速記大会の原動力はそもそも何であろうか。答えは簡明である。

天才的な頭脳と深遠な学識と、そしてたくましい独創力によってつくりなされた中根式速記の創案者。げに東洋のピットマンと仰ぐべき中根正親先生その人。

そして、この卓越無比の中根式速記を感激と奮闘努力の火の玉となって、日本全国はもちろん遠く海外にまで普及指導された、この道40年の速記の聖者、中根正雄先生その人である（正世先生はこのたび深い大局的信念から改名されたので、謹んで衷心より祝福する）この両先生こそ、既往の速記諸式を超えた日本語速記界の大恩人であり、斯界の至宝である。

× × × ×

正親先生が速記に関心を持たれたのは明治44年からで、その間想像もつかぬ苦行、研究、構想、試案に魂を打ち込まれ、ついに画期的な速記中根式を創案発表されたのが大正年3年5月（1914年）である。

中根式が本質的に理想条件を備え覚えやすくだれでも習得できるし、子供でさえも立派にやっておるのが何よりの証拠ではないか。もしこの優秀な中根式が世に出現しなかったとせば、速記を志す者の労苦は思いやられることと思う。そこに中根式がむしろ「日本式」ともいうべき重大な使命と地位を占めている理由である。

しかし、創案当初は万民に1人も速記を見たことさえないという時代であったから、普及がこれまたホネ折りであったことはお話しにならない。

正親先生は当時の思い出をこう語っておられる —

「余は最後に、京極三条の角に約1週間寒風にさらされながら、よる6時から10時までぐらゐの間に、約2万枚ばかりの宣伝ビラを配付して見た。そのころは今（昭和4年）より12～13年前のことで、宣伝などという言葉ははやらないときであったが、

その結果として得たる新入生は、わずかに1名というような哀れな状態であった。さしもの余も、世の冷淡にあきれ悲しみ、一生涯速記など教授すまいと思ひ、速記学校の看板を真二つにたたき割ってしまつて、その決意を示したのであった。(速記研究第5号)」

× × × ×

御令弟正雄先生の速記普及運動はこのときから起こっている。既に速記のメッカたる京都府においては大正3年から、講習講演が始まつており、先生のご郷里長崎県は大正5年から、大阪府は大正8年から、というように、要所要所に拠点のクイを打ち、3府43県はもちろん、遠く海外にまで普及の手を差し伸べられている。

明治5年、学制頒布の詔書に

「邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシム」

と、明治大帝は遠大な理想を述べておられる。

今どき、「いろは」を知らん者は懸賞つきで探しても見当たらないだろう。これは内緒話だが、美しい軍服を着てチューインガムをかみつゝ進駐したアメリカさんの中には、自分の名前さえロクに書けないのが、何%だかまじっているそうなど聞いたことがある。まさかと思うが、日本の普通教育は、世界一普及しているのだから、この点は誇るべきに足ると思う。これは日本の国是として、朝野を挙げて施策を講じた結果であつて、明治大帝の頭のよさがうかがわれる。しかし、速記の普及はこうは行かぬ。

× × × ×

わたしは青年教師のころ、多少新人であつたと自負しているが、「子供のためにおとぎ話の会を開く」というと、ガンメイ校長が「おドケばなしとは不都合じゃ、許さぬ」といつてあたら青年の理想の芽を摘み取られたことがあつた。

速記の宣伝といへば、初期においてはまだヒドイことがあつたのではなからうか。「わたしの学校は農業の学校だから速記なソぞ不要です」「ブルジョアの子弟ばかりです、速記者にはしたくない」「進学準備のジャマになります」「教育法規に速記なソてないでしょう」「役所が認めていますか」「父兄がやかましいだろう」……

学校でも校長という上ご1人が頭を横に振つたらどうにもならぬ。若い先生をとらえて勝手にやるワケにも参らぬ。先方の都合を見計らつて、著書を示し、パンフレットを見せ、実演手ほどきなどをして、シブシブでも「やつてもらおう」となればマシな方であるまいか。(今日ではそんなのは少なからうが)。対談数分、たちまち飛びついてくるようなことは、よほどの理解者でなくては期待できないだろう。

× × × ×

かくて一国一城を陥れて……というコトバが悪い。一クワークワ掘り起こして、種をまいていく。容易ならぬ仕事である。

水戸黄門は全国を漫遊したというが果たして、一県残らず回つたか。これも急がぬ旅であり、つくり話も大分まじっているだろう。高山彦九郎は憂国の志士として尊王を説き回つたと言われるが、その足跡も驚くに足らぬ。ドク舌で名をなしている評論家大宅壮一さんは、半年間に世界50何カ国早回りというアツカマしい旅行をしてきた

が、これとてさほど難しいスケジュールでもなからう。

試みに地図を広げて、学校の番付と首引きして、中根先生がお回りになったところへ、○印をつけてみるがよい。心当たりの学校は必ず含まれているのみならず、知らん校名が随分ある。机の上でのマルつけでさえ神経衰弱になりそう。スキ、キライなしに、各府県をくまなく回り、精魂を込めての指導である。先生の足アトの地図は、満天にきらめく星座に似たものがある。

× × × ×

日本の気候は千変万化である。よい時候を選び、時間を超越して、カネにモノ言わせた大名旅行なら気楽であろう。先生の普及旅行は年中無休で炎熱と闘い、吹雪をおかし、梅雨にぬれ、台風にさらされ、その苦難のほどは宮沢賢治の詩以上ではないか。東西に駆け南北に走り、経線を踏み越え緯線を乗り越えて、神ワザにも等しい活動である。

宿舎についても、千客万来、感激の人達につかまえられ、幾度か夜更かしが続くのではあるまいか。毎日違ったところで講じ、違ったところで泊まり、違ったものを食べていかねばならぬとせば珍しいどころのサワギではない。水が変わってさえ身体のぐあいが悪く、マクラが変われば眠れないという人から見れば、驚異的な活躍ではないか。文化の華、速記国日本建設の信念は、超人的な靈感さえ覚えるのである。

× × × ×

野末まで種をまかなん教え草 いまだ繁らぬ方もこそあれ

これも明治大帝のお歌であるが、何だか先生の念願を詠んであるような気がして、わたしはいつも愛誦している。

今は外国と呼ばねばならぬ台湾、朝鮮、満州にまで、暖かい速記の手は伸びている。植民地だの侵略だのと言われたところであるのに、今では民族を超えてまかれた教え草が、異境のかなたに美しく咲いていることだろう。

ここまで書いたとき、中根先生から速記の手紙が来た。能因法師の「秋風ぞ吹く白河の関」からである。

「……昨日京都発、当地に参りました。あす福島へ参り、20日県下第1回競技会、下旬にはさらに徳島県、岡山県、広島県へ参るだろうと思います……」とある。みちのくの寒行が思いやられる。相変わらず東ホン西走である。ご西下のときには、ぜひ京都に下車されてお父さん思いの敏雄（*長男）君始めご家族の皆さんにお元気な顔を見せていただくようお願い申し上げたい。

お断り — 今度のつたない原稿は、両先生のお気持ちに沿わないかもわからず恐縮に存じております。どうぞお許しを — 筆者

感激と奮闘努力

第8話〔昭和32年3月号 No.12〕

我が中根式速記法を、最も如実に表明するコトバが3つある。その1は「カンゲキ」、その2は「フントウドリョク」、その3は「テッテイ」である。この3つのコトバは、我々速記人にとっては、最も多く使い最も多く接する、親しみ深い、魅力的なものである。

中根式速記運動は、今や全国的にハウハイたる勢いで嵐のように巻き起こってきた。もうここまでくれば、わざわざ「中根式中根式」と念を押さなくてもよいような気がする。少しぐらいかじって、何式かが気になる人は別として、「中根式」というコトバを強調することはないまい。「速記といえば中根式」と考えられるようになったからである。

近ごろ流行の洗濯機も、厚子殿下が岡山の池田トノ様へお嫁に行かれたころには、「電気、、、」というように「電気」の2字をつけたのであった。「アバラボネ洗濯板」と区別するためであった。今日ではその必要がなくなった。「洗、、、」で結構通じる。

× × × ×

わたしは、中根式に別の名があるならば、それは「感激式」ではないかと思う。40余年の発展の歴史をも持ち22回の全国高校大会までやってきた中根式は、今や、押しも押されぬ速記界の雄である。

殊に、この若き学徒に普及し、全国大会を実施する価値多き独創的企画は、速記大学を持つアメリカでも、ピットマン先生のイギリスでも、恐らく青い目を一層青くして驚いているだろう。いずれこれは、国際速記大会を日本へ招致したときに、大いに気エンを上げることにしておいて、ここでもう一度、大会のシンボル「優勝感激旗」を見直そうではないか。

速記学徒あこがれの的、サン然たる優勝感激旗には、真紅の地色に雄コンな「感激」の二大文字が鮮やかな金糸で縫いとられている。優勝の優の字も月桂樹も、そして中根式速記の記章もあしらわれていない。簡単にして崇高なること「日の丸」のごとく、それほど卓抜無比なものである。ただ感激！

この感激旗こそ、伝統を誇る中根式速記の標語であり、信条であり、そして象徴である。ただに優勝校だけのものではなく、中根式速記人のすべてのものであるのである。

× × × ×

ああ感激！何という尊くも頼もしいコトバであろう。そして感激の権化こそは中根先生その人である。

わたしは、「速記時代」の前身である「中根式速記」が創刊（昭4年4月15日）された当時、同誌にそのときの感激を次のように述べた。

— 「その泉のごとくわき出ずる独特無比の講義ぶりは、朝に新たにして夕べに改

まり、卓抜な着想とユーモアが配せられて、神出鬼没、縦横無尽、しかも全身全霊にみなぎる大きな理想に統制して……」

「最初の一声によって、幾千の聴衆をたちまち掌中にとらえて、科学の殿堂、芸術の楽園に誘導し、陶然コウコツたらしめるうちに、組織化し、生命化し、深刻無限の印象を焼きつけねばおかぬ……」

「講師涙あり聴衆涙あり、講師熱あり聴衆熱あり、感激はさらに感激を生み劇的なシーンを繰り返す……これが速記講演の常である」

「かくも尊き講演が行われるゆえんのものは何であろうか。これ、速記こそは、中根先生の涙の追憶、血の歴史によって、祈りに祈りつつ大成された聖なるたまものであって、燃ゆるがごとき国家愛、人類愛のほとぼしれる、白熱的救国文化運動の第一線をバク進しておられる先生の感激に触れるからであろう」

「愛する国家を文字国難より救え！速記報国！開かれよ、先生の聖く尊き叫びを！」

「先生の声聞く者は必ず動く。動かざれば人にあらずである。速記は懦夫（*だふ）をして起こたしむるのみならず老人をも若返らしむると申しても、少しも言い過ぎではあるまい——」

× × × ×

「感激性なき民族は滅ぶ」——哲人の言った警句であったと思う。

優秀な発明発見に対しても、美しい善行に接しても、親切な厚意を受けても、何らの感激を起こさぬとしたら、それは人間以下の社会と言いたい。

ブタに講義を始めても、お土産の焼きイモを平らげた後はグウタラと寝そべってしまうだろう。

多くのお寺（皆ではない）では、お布施稼ぎから一步も出ず、無知迷信の徒を相手に、祈祷、占い、さては地ゴク極楽のと、四苦八苦の経営難ではないか。修業をよそにして、みずからの感激を持たず、人を濟度せんとは、もってのほかと、エンマにかわり引導を渡しておく。

悪口はともかく、我が中根式では、高い理想を目指して、感激は感激を呼び起こし、千波万波となり、果てしなく広がっていく。そこには、希望あり歓喜あり、研究あり自覚あり。かくて、中根式速記人共通のコースたる「奮闘努力」をマイ進することになるのである。

再び、感激と奮闘努力

第9話〔昭和32年4月号 No.13〕

中根式の速記には、どこを触っても感激という血が流れ、奮闘努力というスジガネが入っている。

感激が奮闘努力させ、奮闘努力が感激をわかせる。科学的合理的な素質を持ってい

る中根式が、純真な感情と、強固な意志を備えていることは、前途夢多い若さを誇るものといえよう。

中根式の生い立ちを見ても、感激と奮闘努力の連鎖である。

既に在来速記方式が幾つかあって帝国議会第1回から、どうなりと速記が間に合ったというのだから、その後から新方式を名乗るためには、よほどの自信と奮闘努力がなくてはならなかったと思う。

それについても、中根式創案のいきさつと苦心のほどがどうであったか、「中根式速記」No.12により、正親先生の述べられているところをうかがうことにしたい。失礼の点お許しをこう。

× × × ×

「そのころ（明治44年）ある朝5時か6時、ふと京都日出新聞の5行広告に「職あり人を求む」というのがあった。当時貧窮その極に達し3食すら完全に得ない状態にあった自分にとって、電光のごとくその5行の文字が頭に入ってしまった」

白川エイ山の登山口まで約1里近い道を駆けつけていかれた当の主人公は当時京大嘱託速記者松川梅賢氏で、同氏がかねて練習中の英文速記のリーダーとして、人を求めたわけであったそうである。

「1時間わずかに6銭1日4時間のリーダー生活をもって、やっと1日2食のみにありつき得て、しかもなお歓喜の声を上げた当時の自分を想起してまるで夢のようだ」

凡人では到底マネのできない奮闘努力の日々である。こうして約1年間ほとんど毎日3時間以上ずつ速記者生活を見てこられた先生は、速記のおもしろみが頭にひらめくようになり、みずから速記の技術方面の練習を始められたということである。

しかし、日本最新の某式でさえ、その習得には随分過激な努力をせられたが、結局満足 of いくものではなかった。

そこで先生の目は英国のピットマン式に向けられ、その式の科学的合理性を、英語とは全然異なる日本語の速記に取り入れることに心血をそそがれた。

日本の在来方式を小細工いじりしては、何々式と売り出しているものが多いのに対し、東西両洋の粋を集めて独特無比、優秀卓抜な方式を創定されたのである。中根式の誕生である。

およそ発明発見の苦心は、凡人の及びもつかぬ、時代の先見性や、天才的な頭脳がいるが、生みの悩みの奮闘努力はことの成否を大きく左右したことだろう。

「したがって最後の方式が決定するまでには、ほとんど17回基本線を取りかえたというようなありさまであった」

と言っておられる。キの字をどうする、チの字をどうするというようなことが決まるまでに、17回も取りかえたことがあったとは、後に学ぶ者、少しは親の心も察しなければ、バチが当たりはしないかと思う。

× × × ×

中根式の標語たる「奮闘努力」は、既に中根式速記が、世に発表されるに先立って、

創案者正親先生が、人知れず体験してこられたところであって、これこそ、救世の聖哲がたどる共通の苦行にも似て、尊い限りである。

跡を継いで、中根式速記法を大成し、これを普及せられ、また、せられつつある令弟正雄先生の偉大なる業績は、まさに驚嘆に値するものがある。その奮闘努力ぶりは、だれもがマネもできない、足元へも寄れない。先生の奮闘ぶりについては、到底想像もつかないが、失礼をも顧みず、わたしなりの筆で、既にその一端を本誌の上で汚している、お許しを願いたい。

× × × ×

「奮闘努力」を高唱した人は、中根先生のほかには、わたしは、東郷元帥しか思い浮かばない。日本海海戦においてロシア艦隊を向かえ、まさに火ぶたを切ろうとしたとき、司令長官の東郷元帥は「皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」と旗艦三笠に信号をかかげた。東郷さんは最後の切り札として、「Z旗」という最大線を使ったのである。

この場合、「奮励努力」は「奮闘努力」と見てもよかろうが、あえて両者の違いを上げるならば、「Z旗」は「この一戦に必勝せよ」という、最後の激励である。わたしは、これを「一時的またはシュン間的奮闘努力」と言いたいのである。

中根式速記の奮闘努力は、一時的ではない。「永久的奮闘努力」である。奮闘努力は非常時的姿でなく、平素そのままの姿である。

× × × ×

わたしはこの辺で、愛誦詩集、後藤静香著「権威」からの一説を詠んでみたい――。

「奮闘なるかな、奮闘なるかな。

奮闘を離れて休養なく娯楽なし、命がけの奮闘。

血の汗が滴る全身全霊の緊張。

その間に感ずる得も言われぬ奮闘の妙味。

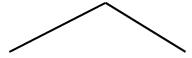
片々たる区々たる小娯楽は語るに足らず。

奮闘を離れて向上なく充実なし。

立も倒るるも、生くるも死ぬるも奮闘また奮闘。

人間の特権なるかな！」

× × × ×

最大線の中でも「

」の字に似た「奮闘努力」は、速記文字中の寵児であろう。中根式速記人である限り、これほど親しんでいる文字はなかろう。それというのも、この簡単な記号の中に、中根式の指導精神が充満しているからではなかろうか。

奮闘努力の記号は、大学生の帽子のようであり、屋根のようでもある。たくさん並べると、波のように見えるではないか。金波銀波が果てしなく広がっていく。また、山また山が重なっているようにも見える。未来を夢見る緑の山並みを楽しませてくれる。1つだけ大きく書いたところは、日本一の富士山だ。

わたしらの速記文字は、幾何学上の線でも弧でもない。

「ネコに小判」ということわざがあるが、「もう一步も歩けぬ」と投げ出している山登りの友に、ウドン箸で「奮闘努力」をつくってみせたら、それが中根式速記人であったとせば、どんな反応をあらわすだろうか。

× × × ×

さて、我が中根式の目指すところは単に速記者の養成だけではない。もしそれだけが目的ならば、とうの昔に、中根式は軌道に乗り、たんたんたる街道を歩んでいたに違いない。奮闘努力も職業意識を脱しないであろう。

中根式は国民皆速記を目指し、速記文字の普及によって、日本の文化水準を高めようとする。高遠な理想を持っている。この理想を実現するための一大文化運動を起こしているのである。

そのためには、速記技術の伝達のほか国民全体への普及や速記そのものの理論的研究にも、さらに進出せねばなるまい。

恐らく中根先生のご構想には、すばらしいものがあるのではないか。わたしたちは、この程度でまだまだ満足してはならないと思う。

大空にそびえて見ゆる高嶺にも

登れば登る道はありけり

明治天皇のお歌から富士を想い、そして最大線「フト」に思いをはせる。「奮闘努力の山の何合目を登りつつありや」と自問自答してみるわたしである。

忘れられたる中根式速記文字の特長

第10話〔昭和32年5月号 No.14〕

中根式の最大の特長は、インツクキ法にあると思う。「2音よりなる漢字の2音目には、インツクキのどれかが必ずつく」ということを看破された創案者の卓見は、速記史上に限らず漢字発音界の一大発見として、永久に光を放つものである。何となれば、このような漢字発音上の分類は、後にも先にも全くないからである。

さればこそ、先人速記家も「斯界の白眉なり」と称賛し、当時の毎日紙も「インツクキの妙法」と最上の言葉をもって絶賛したゆえんであろう。

× × × ×

現在行われている普通の日本語の表記法は、次第に簡易化の方向に改められつつあるが、実際においては、まだまだ漢字から来た熟語が多い。試みに、朝日（昭和32年4月18日）の政治面を見ると、

実験、日英、国民、大戦、直接、生産、関係、伝達、発展、侵略、軍縮
などがあり、また、学芸面には、

青年、団体、特色、経済、建築、免税、精神、判断、開設、宣伝、積極
というように、たちどころに、数十数百語を拾うことができる。ここではインツクキ漢字の二字連結の熟語を上げただけだが、インツクキ漢字一字を含む熟語 — 例えば

禁止、外交 ― をも、仮に紙面から抜き取ってみると、その後の紙面はほとんど、仮名と空白とになってしまうのではなからうか。

それほど、インツクキ漢字は、今なお多く活躍している。これは、とりもなおさず速記文字化されると、高能率を発揮することを裏づけるのである。

× × × ×

ところが、各種の文字の読み方の速度の難易を比較してみると、漢字が最も速いようである。

田、馬、母、思、持、体験、生産

のような漢字は、一見直ちに読めるし同時に、その文字の意味内容もすぐわかる。

ところが、片仮名や平仮名ばかりで書いた文になると、漢字まじりを読むように、すらすらとは行きにくい。単語を発音として読み取るのにある程度のヨドミを生じ、文字の意味ないし、文章の意味をつかむのに、判断を要する場合がある。

テンノウヘイカ、ゲンスイバク

などは、すぐ内容がわかるけれども、例えば、

コウエン、ギイン、キカン、シガイ

となると、文脈を探らねば適当な意味が当てはまらない。特に思慮深い表現を使うのもこのためである。

× × × ×

ローマ字においては、仮名1字を、ローマ字大体2字であらわすのだから、読み能率の上がらぬのは当然である。

例えば、sakuraというローマ字はsとaをあわせてサと発音するように6字を合わせてサクラと発音するのである。

ところが仮名論者でもローマ字論者でも、わたしのような説はしないで、「単語の1つ1つをまとまった語形として、すぐ読み取る」のだという。

わたしは、青年教師のころ、既に中根式を知っていたので、音標文字（表音文字）という点で、ローマ字も親類だから、ローマ字教育には、他の教師以上に研究もやりし実験もした。進歩的な教授法によると、前に説明したような、一見してたちまち読破する ― 直感的読み方が可能であって、できないのは練習が足りないのだということであった。（英語の単語はローマ字とは全然違うから混同して論ぜぬようにご注意ください）

しかし、わたしの努力はそこまで達しなかった。短い単語ならばできるが、そこには、おのずから限界がある。たとえ、すばらしく速く読むものであっても、長い単語になると、綴りの順にイナヅマのように、視線を走らせている。直観してしているように見えるけれども、そこには、わずかながらも、ヨドミがあることを知った。

× × × ×

ここで以上のことから一応まとめてみると、仮名やローマ字の文章は、漢字まじり文よりも読みにくい（文意をとらえにくいことを含む）ということである。これは、音標文字共通の欠点であって、速記文字も音標文字である限り、ある程度その欠点を

認めないワケにはいかない。

すなわち、漢字は、音標文字に比べて、

1. 見覚えやすい字形を持っている。
2. 読みに伴う意味をもっている。

ことが特長で、このことが漢字まじり文が読みやすい最大の理由である。

もし、音標文字が、読みにおいても漢字まじり文に負けないとされる人があったら、わたしは読み方競技に応じてよい。双方から男女同数の選手を出して比較してみようではないか、さすれば何か参考となるデータが得られておもしろいだろう。

× × × ×

さて、わたしは、思わぬところで急進的な音標文字論者に、戦いを挑むようなことを言ってヘンに取られたかもしれないが、欠点は欠点として認めた方がよかろうということが言いたかっただけである。

そもそも、仮名、ローマ字論者とても音標文字という点では、我々速記人と同類である。これらの3つの論者よりもはるかに進歩的であるし、また、わたしも、漢字保守の城に立てこもっているものでは絶対でないことは、読者諸兄もご了解くださっているものと信ずる。

× × × ×

前提が長くなったが、これからいよいよ、中根式インツクキ法が速記方式の上から、極めてすぐれたものであることを力説していくこととしたい。

インツクキの記号のつけ方は、例えば、カの頭にイの記号を、ゼの頭にンの記号をつけて、それぞれ、カイ、ゼンと読むのである。この方法は普通には逆記法とされている。記号を文字の一種と見て、順に読むと、イカ、ンゼとなるからである。

逆記法という、いかにも変則的な書き方で、速記するときには、カイ、ゼンを一々、イカ、ンゼの頭の中でひっくり返して書かねばなるまいというように考えられるかもしれない。

しかし、やってみると以外にも平易で、初歩第1回の講義の直後、イカンゼのように、イの尾に大円、ゼの尾に小円をつけて書く者は100人の中に2～3人しかあらわれない。それも、ちょっと注意すると、たちまち勘違いしていたことを悟り以後、この種の書き損ないは絶無である。これは、多くの指導者が実験されていることだと思う。

× × × ×

そこでわたしは、速記法の逆という文字にとらわれることなく、この書き方こそ、むしろ、卓越した方式であるという論を進めたい。

逆記法を用いない他の多くの方式では、カイゼンという文字をカ、イ、ゼ、ンと順々に書く。したがって読むときも、いかほど上達しておっても、カ、イ、ゼ、ンという4字を順々に視覚に写して読むことになる。仮名やローマ字も、同じ過程をたどることになる。

ところがインツクキ法ではカイゼンという文字を、速記では、カイ、ゼンと、2つ

の文字にまとめて書く。そして読むときにも、カイ、ゼンの2つの文字にまとめて読む。だから読み方が速い。あたかも、箸をそろえる作業において。1本1本そろえるよりも2本1対にして、くくってあるものをそろえる方が速いのと同じ道理ではないか。

このことは、さらに、別の大きな特長をもたらしていることに気づかねばならぬ。
例えば

哲学、警察

という文字を、速記で書くとき、これを基本文字だけで書けば

テツガク、ケイサツ

と順記するだけで（逆記法によらぬ他式は皆これ）書き能率が上がらないのみか、文字ヅラも味のないものになってしまう。速記に対して全然無知の者の目には、「ミミズのはったような字」とか「折れクギ流だ」とかに写るのもやむを得ないではないか。

× × × ×

ところが、「インツクキの妙法」が出現しますと、ミミズや折れクギはたちまち様相を改め、颯爽たる風格をあらわすのである。

これは単なる体裁だけではない。インツクキ法によって縮約された速記文字の形が、立体感を伴い、したがって見覚えやすい字形を形成することとなる。そこで、ミミズや折れクギの読みにくいのが、一躍、断然、読み能率も高めることになるのである。妙法たるゆえんよってクダンのごとし？

こうなると、書くことにおいて、読むことにおいて、すこぶる容易になり運筆や判読にも精力を消耗すること少なく、のみならず、速記ヅラそのものもまことに美しくて気品ができる。

× × × ×

元来無味乾燥なはずの速記文字にもかかわらず、これほど美的な、これほど芸術的な風格を備えている方式をピットマンに見せたら、さぞかし快哉を叫ぶことと思われる。

ここにおいて、わたしは、結論的に言いたいことは、元来音標文字の仲間である速記文字が、全くハタケ違いの漢字が持っている最大の特長—見覚えやすい字形、したがって読みやすい—を、中根式に限って、多分に兼ね備えていることである。速記文字が、漢字の特長を持っているという優秀性を、ここで確認していただきたいのである。

(1956. 4. 19記)

*1956年（昭和31年）1957年（昭和32年）